

自由南アフリカの声

Voice of Free South Africa

2010年10月

No. 54



～1冊の本が人生を変える～

発行 / アジア・アフリカと共に歩む会

Together with Africa and Asia Association(TAAA)

2010年10月までの報告と予定

- 5月～10月 南ア教師研修と移動図書館学校訪問
ウグ郡プンガシェ教育センターと会議
- 5月～9月 毎月1回、本の梱包作業と会議(日本)
- 8月 日本よりTAAAスタッフが南ア訪問
- 9月 TAAA南ア事務所代表、一時日本へ帰国、活動報告会実施
- 8月～10月 学校菜園プロジェクトについて農業指導専門家と協議・菜園実施
- 10月 グローバル・フェスタ出展(日本)
- 10月 南アへ英語の本13466冊、サッカーボール112個などを送付

目次	南アの近況とTAAAの活動報告(平林薫)	2
	牧野久美子さんの講演内容(丸岡晶)	5
	TAAAプロジェクト視察報告(丸岡晶)	6
	南アフリカ訪問で感じた事(山下八千穂)	8
	「どっちが深刻? 日本の貧困 世界の貧困」(久我祐子)	9
	TAAA学校訪問記(青江翔太郎)	10
	主な活動・ルイボステイ	11
	寄付・会費・本などを下さった方々	12



国際ボランティア貯金の支援でシャラガシェ小学校にコンテナ図書室を設置しました

南アの近況とTAAAの活動報告

TAAA南ア事務所代表

平林 薫

ワールドカップ直後のストライキ

W杯の夢から覚めて、図書プロジェクトの教師対象の研修会の挨拶で、私は“素晴らしいイベントでしたね。先生方も楽しめましたか”と尋ねたところ、しら~っとして“そうでもなかった”“つまらなかった”の声が上がりショックを受けた。町に住む余裕のある人たちが、スタジアムに行かなくても、ファンパークなどに集まって盛り上がっている一方で、“W杯など私たちには関係ない”という気持ちだったに違いない。

世界一格差が大きいといわれている国で、これまで我慢し続けてきた人々が日々の“不公平感”に怒り、“不公平だ”と表明し始めている。それがいま、各分野でのストライキとなって噴出している。

公務員の組合は、W杯直前にストを行うと政府に警告していた。政府は、“W杯が無事終わったら話し合いの場を持つ”と約束したが、終了後も政府は知らぬふり。とうとう、8.6%の賃上げと月R1000（現在のレートで約13000円）の住宅手当を要求してストに突入した。8月後半から約1ヶ月続いたストは主に学校と病院という、人々の暮らしに一番重要な場所で起きた。政府は7.5%の賃上げ、月R800の住宅手当を提示し、現在、組合はストを3週間中断して、この提示を受け入れるかどうか協議中。

公務員の給与レベルは細かく分かれているが、優秀な人材の多い一般教員や看護師の中に、もっと上のレベルへの不公平感が強いと思われる。例えば、学校内では教師と校長の関係。プロジェクトの中で担当教師と話をしていると、頻繁に校長への敵対意識ともとれる場面に出会う。

遠隔地の先生方は、ぎゅうぎゅう詰めのミニバスタクシーで交通事故の危険にさらされながら、長時間の通勤をしている。学校の設備も悪く、教材も不足する中で教鞭をとり、貧しい生徒のケアもしなければならない。そのような仕事に疲れ、不満がたまっている状態の中、やる気を失っているような教師も見られる。

新聞の投書での一般的な意見は、安定した職を得ている公務員は恵まれている、給料を上げろというのは自分勝手である、とか、国の将来を担う子供たちのことを考えたら、大事な時間をストで無駄にするとは何事だ、というように公務員を責める内容が多くみられる。また、卒業試験を控えた高校生は、教師に対しての信頼と敬意を完全に失ってしまった、と話す。教師が強硬手段に出るなら自分たちもと、“卒業試験の得点25%上乘せ”を要求してデモを行う学校も出てきた。

1994年の総選挙直後から南アの変化を見てきた私が今一番感じるのは、私が南アに住みたいと思った要因である“あたたかくてやさしい人たち”がどんどん減ってきているのではないかと、ということだ。新しい国で成長した若者たちは今や“自分の権利”ばかりを主張するようになり、アフリカ人のお母さんたちもキャリアウーマンになった途端、生きる目的がお金になってしまったかのように見える。南アフリカが目指した変革はこのようなものだったのだろうか。

多くの人々が命がけで闘い、アパルトヘイトの制度を廃止させた南アでは、今、経済によるアパルトヘイトともいえる状況に陥っている。10年前に、12、3歳でジョハネスバーグのストリートキッズだったエルビス君が“お金はいつも問題を引き起こすんだ。僕が神様ならこの世からお金をなくしたいよ”と話していたこと

写真：貰ったクッキーを“分かち合うところ”



が忘れられない。子供ながらにすでにお金の怖さを思い知らされていたのだろう。今、パパになったエルビス君は日雇いの仕事をしながら何とか生活しており、いまだにお金の心配が尽きないようだ。

アパルトヘイト当時から政府や企業内では給与格差が非常に大きく、これを是正せずに一部の黒人を登用したことで、一気に裕福になった黒人が出現した。有色人優遇の経済政策も、多くは大企業の経営陣に一握りの黒人の顔を入れる、というようなもので、彼らは主に有名な活動家自身やその子供たち、亡命をして海外で教育を受けた人などで、タイミング良く地位についてのように見える。命がけで反アパルトヘイトを闘ってきた人々には、今、豊かさを享受する権利はあるだろう。しかし、国内のすべての人々がアパルトヘイトの直接、間接的な影響を受けて生きてきたわけで、新しい国になり、豊かな生活を求める気持ちには変わりはないはず。

すでに豊かな人たちがもっともっとと異常なほど貪欲になり、貧しい人たちがずっと我慢してきた、不公平に対する怒りが爆発寸前というところまで来ている。アフリカ人が大切にしてきたコミュニティーの意識、他人に対するリスペクト（敬意の気持ち）、そして分かち合う心を失いつつあることを危惧する。



写真：「面白そうな本、見つけたよ」エマクルセニ小で

ボランティア貯金による図書活動支援プロジェクト

昨年4月に開始された図書活動支援プロジェクトは、現在、ダーバンの北西部ンドウェドウェ地域の小学校40校で学校図書室設置の支援と移動図書館車の巡回訪問を行っている。今年度は図書室を設置するためのスペースがない学校8校に、改装したコンテナを寄贈し、コンテナ図書室を設置した。1月始まりの4学期制で、1学期に一回、教師対象の研修会を行い、本や図書室の使い方、管理方法などを指導している。移動図書館車は一校当たり一学期に2回訪問している。基礎教育省が図書室の重要性を認識し、各校の図書室設置を推進しているタイミングでもあり、学校側は特に熱心に活動を行っている。図書室が重要だと言いながら教育省からは何の支援もない、と嘆く校長や教師もいる。実際、図書室が設置できた学校は、NGOのプロジェクトに参加するか、企業から寄付をもらうか、省内に親しい人がいて優先的に設置してもらうかのいずれかである。

勉強が好きな子もそうでない子も、活発な子もおとなしい子も、それぞれお気に入りの本をバスから選んでいる。これまで目立たなかった子が本をよく読み、文章もしっかり書けることを認識できたという教師もいる。バスに積んでいる本はほとんど日本から送られてきたもので、質が高く、小学校から高校まで大変役に立っている。現地語ズールー語の本はプロジェクト資金で購入したり、日本語の絵本をズールー語に翻訳したりして寄贈をしている。これまでに“ぐりとぐら”“そらいろのたね”を翻訳し、ステッカーを貼り付けた本を寄贈して大変喜ばれている。小学校で生徒たちが早くから本に親しみ、読み書き能力をつけるための活動はとても大切。ただ、現時点で多くの高校には図書室も本もなく、生徒が十分に勉強することができない状態が続いているが、州教育省の職員は、学校は資金や時間の不足を理由に図書室設置を先延ばしにしていると言う。教育省が学校に自分たちで図書室を設置せよ、と要求するのは無理がある。教育省にはすべての学校に図書室を設置する資金も人的余裕もないのだ。

私たちNGOがすべきことは、そのような状況の学校に、改善のためのきっかけを与えることだと思う。そして現状に対して不満を持ち、やる気をなくしている先生方を応援することではないか。子供たちだけでなく、先生方も誰かが学校の様子を見に来るだけでも“自分たちは忘れ去られていない”ということを感じて、少しの支援がモチベーションにつながるようだ。

写真：昼食時に読み聞かせをする筆者、クワシヤンガセ小にて

JICA 草の根技術協力事業・学校を拠点とした 地域農業促進プロジェクト

今年7月よりクワズルーナター州の南部、ウグ郡の3地域ーピングアシェ、ドウドウドウ、ヒバディーンにて開始。小学校20校、高校3校とその地域の住民が菜園活動を行い、地域の農業促進を目指すプロジェクト。担当スタッフは農業専門家1名、巡回農業指導員2名の3名体制で行う。2007年から2年間行ったンドウェドウェ地域の学校菜園プロジェクトでの経験をふまえて、うまくいった点や問題点などを振り返りながら、活動を開始したところだ。今回の地域は道路や水道などインフラの整備がより遅れており、失業率も高く、老齢年金や子供の養育金などに頼って生活している状況にある。農業を行う条件としては、降雨量や気温、土壌などの自然条件は比較的恵まれている方。とはいえ、乾季に入る冬の時期の水の確保は活動を進めていく上で重要なポイント。



前回のンドウェドウェ地域で活動を始めた時にはほとんどの学校が川に水を汲みに行っていたが、現在はかなりの数の学校の敷地内に水道が設置されたか、もしくは近くに公共の水道が設置された。ンドウェドウェでは、活動終了後も順調に菜園作りが行われている学校もあるが、時間に余裕がないなど学校側の都合や、種が近くで購入できない、購入する資金がないなどにより、畑作りが中断している学校もあるので、依頼があった場合は図書活動で巡回訪問する際に種を届けている。

ンドウェドウェのプロジェクトの際に、地域住民からの協力が得られない学校があったことから、今回の事業では開始時より地域住民も活動を行い、学校の活動にも協力してもらえるよう話し合いをしている。南アの学校は4期制で休暇が多いので、休暇中の畑への水やりや収穫は地域住民の協力が必要であることを実感した。活動がうまくいった学校は、先生方も地域住民、つまり学校の近くに住んでいて休暇中も畑の世話ができた場合。苦勞していた学校は、先生方がみな町から通ってきていたこと、校長先生が畑仕事にあまり興味を持たず、地域住民への協力の呼びかけも積極的に行わなかったことなどの要因が挙げられる。今回の事業では学校を拠点として地域の農業促進を大きな目標としていることから、主に保護者によるコミュニティー菜園グループを作り、家庭菜園を支援する。従来、コミュニティー菜園というと、大きな敷地に共同で野菜作りを行うパターンが一般的であったが、この方法には問題点もある。大きな敷地で野菜づくりをすると、収穫も多く収入を得る可能性も高くなる。ただ、収穫の分配をどうするか、労働時間の不公平、資金や農具の管理、取り扱いなどで問題が上がることもある。そこで今回コミュニティーへの支援は有機農法による家庭菜園作りを中心とする。活動を行っていく中で効果的に共同農園ができるような状況が整えば、換金作物を共同で栽培することも考えている。今回、対象とする3地域から、学校の状態ややる気を考慮して高校3校を選んだ。高校には農業科学という選択科目があるが、教材の不足から実習がなかなか行えない、という声があった。そこで、プロジェクトでは農具や種を支援し、学校の敷地内に実習農園を作り、受講する生徒が、将来農業を職業の選択肢とすることができるよう、より具体的で詳しい知識と技術を得られるよう指導していく。高校で活動が順調に行われてきたら、その土地にあった作物や、換金可能な作物等も模索していきたいと考えている。小学校では前回のプロジェクト同様、収穫を給食に利用して栄養価を高め、余剰分を販売して学校の資金とする。生徒たちが楽しみながら野菜作りの方法を学べるような活動を行っていきたい。現在、学校は春休みに入っているので、休み明けに教師対象の研修会を開催した後、各校に農具と種を配布し、植え付けを開始する。

3地域からプロジェクト対象校として選定された学校の中には、これまで自助努力で野菜作りを行ってきた学校もあるが、プロジェクトでは有機農法をベースに安全でよりよい収穫を得られるような栽培法を指導していきたい。

牧野久美子さんの講演内容

～2010年9月26日 JICA 地球ひろばにて～

丸岡 晶 (まるおか まさる)

TAAAは、日本のみなさまに事業内容を知って頂くため、年2回ほど報告会を開催しています。今回はいつもと趣向を変え、南アフリカ事務所代表の平林さんに加え、日本貿易振興機構アジア経済研究所研究員の牧野久美子さん（当会会員）に「TAAA学校菜園プロジェクトの意義－アパルトヘイト後の社会開発の課題に照らして－」と題して、約1時間講演をして頂きました。

まず、「アパルトヘイトが残したもの」というタイトルで、“人種格差”および“経済の二重構造”について話して頂きました。アパルトヘイトは撤廃されたものの、経済格差はむしろ広がっています。南ア発の世界的大企業がある一方で、人口の半数以上が貧困ライン（南ア統計局試算）以下で生活しています。

農業についても同様の二重構造があり、白人による大規模農業がある一方で、黒人による小規模農業は自給的レベルにありません。アパルトヘイト以前からの土地収奪の歴史が背景にあり、アパルトヘイト後の再分配政策である土地改革が遅れていることも原因となっています。

次に、「ANC政権の取り組み」というタイトルで、現政権の政策について解説をして頂きました。ANCは基本的に、市場経済重視が基本路線であり、経済成長により雇用を生み出し、再分配を果たして格差をなくすことを目指してきました。

雇用創出が最大の課題であり、それを期待できる産業（観光、コールセンター、農業・農産物加工）の育成がはかられています。失業が貧困の最大の要因ですが、失業者は非熟練労働者に集中しており、教育の重要性を再認識することができます。

そして、上記2点の背景を踏まえ、「TAAAの菜園活動の意義」ということで、当会の活動についてよりマクロな視点で分析して頂きました。TAAAは教育支援をベースとしており、近年はJICAの助成を受けて学校菜園活動にも取り組んでいます。本活動は、必ずしも政府の政策を受けてのものではありませんでしたが、南アでは全国学校栄養プログラムがあり、学校菜園の野菜を給食に使うことが奨励されています。その理由としては、生徒の栄養状態を改善できることに加え、出席率や集中力の向上が期待できるなど、教育面での効果があることがあげられます。

こうした観点から考えると、TAAAが推進している学校菜園活動は、国のプログラムと整合性がとれており、現在この国のプログラムが必ずしもうまくまわっていないことを考えると、実施する意義があることがわかります。また、そもそも根源的な話として、学校菜園からコミュニティ菜園への広がりを考えた場合、自ら生活の糧を得ることで、南アフリカの人々が人間の尊厳を取り戻すきっかけにもなります。

最後に、興味深い事例を取り上げて頂きました。それは、南ア教育省の年次報告に、TAAAが支援しているンドウェドウェ地域のズバネ小が事例として掲載されていたことです。TAAAの学校菜園活動は、政府の意向を受けたものというよりは、長く継続している学校図書活動と相乗効果をあげるために始まりましたが、南アの国が目指す方向性と合致しており、今後地域に定着する期待が持てそうなエピソードでした。

なお、当初予定にはありませんでしたが、平林さんと牧野さんでミニ対談をしていただき、牧野さんから提示して頂いた課題について平林さんからコメントしてもらうことができました。

今までの報告会では、平林さんによるみずみずしい現場の事業報告について、参加者でディスカッションして深めていく形式でしたが、今回は南ア地域研究の専門家として牧野さんから講演をして頂くことにより、TAAAの活動があるべき姿に向かっていることを確認することができました。

写真 TAAA 講演会で話される牧野久美子さん



TAAAプロジェクト視察報告

丸岡 晶（まるおか まさる）

はじめに

8月21日（土）～29日（日）、野田代表、山下さんと3名で、南アフリカ共和国クワズールーナタール州ンドウェドウェ地域を中心に、TAAAプロジェクトを視察しました。今回は10校ほど小学校を訪問する予定でしたが、全国的にストライキが起り、特に教員のそれはなかなか妥結せず、訪問校は一部に限られました。しかしながら、空き時間を活用し、学校と同じく様々な課題があるケア施設



写真：移動図書館のスタッフとミーティング（中央：筆者）

を訪問したり、現地スタッフへのヒアリングやミーティングを重ねたりすることで、改めてプロジェクトの成果があがっていることを体感し、課題やそれに対処するアイデアなども浮かび上がってきました。

移動図書館車の意義～その機動力と、“図書管理システム”導入による相乗効果

TAAAは28台の移動図書館車を南アへ寄贈してきましたが、そのうち1台はンドウェドウェ地域を中心に、TAAA現地スタッフが直接運行しています。今回の視察では移動図書館車とともに学校へ行きましたが、舗装されていない山道にもかかわらず、たくましく走っている雄姿が印象的でした。改めて日本車の性能や現地スタッフ（マイケルさん）の運転スキルに感心するとともに、交通の便が悪い小学校へ効率的な教育支援を行うには、現在のところ最善の方法ではないかと実感しました。

また、この移動図書館車は昨年より図書管理システムLibwinを導入しており、より効率的な貸出が可能となっています。Libwinは南ア製のパッケージソフトで、ラッシュジャパンの助成により導入できました。本が寄贈されると逐次、種類・タイトル・著者などを入力し、データベース化します。また、貸出先は各学校の先生になりますが、バーコード付きのカードを印刷して作成し、ラミネート加工して先生方に配布しています。日常の貸出・返却については、もう1人の現地スタッフ、シャさんが、バーコード読み取り機によってスムーズに対応しています。

約6千冊の蔵書を抱え、それぞれ離れた場所にあるンドウェドウェ地域の42校を満遍なく回るにあたり、この移動図書館車と図書管理システムが大きな相乗効果を発揮しており、今後もこうしたインフラ整備の維持・改善に向けた投資が必要だと実感しました。

学校図書室の設置～“コンテナ図書室”と“プレハブ図書室”というパッケージ

移動図書館車が各学校を精力的に巡回していますが、やはりそれだけでは限界があります。ゆくゆくは各学校に図書室が設置されれば、子どもたちはいつでも本を手にとることができます。しかしながら、空いている教室が少ないという現実があります。また、教室を増設するにしても、例えば1教室あたり100万円ほどの費用がかかってしまいます。

そこで現在TAAAが進めているのが、プレハブ図書室やコンテナ図書室の設置です。プレハブは家としても使用できるものですが、約50万円で設置可能です。また、コンテナ図書室になると、約25万円あれば3×6mほどの広さを確保できます。今回の視察では、ヴレラ小のコンテナ図書室を見学し、マシザ小のプレハブ図書室設置に立ち合いました。ヴレラ小のコンテナ図書室は本がきちんと並べてあり、丁寧に大切に使用されている様子をうかがうことができました。



また、壁には本を扱う際の注意を絵で示したポスターが貼られており、維持という観点でも問題がなさそうです。コンテナといっても窓があり、そこから美しいンドウェドウェの山並みを望むことができました。マシザ小のプレハブ図書室は、ダーバン在住の中地さんの関係で助成金を頂き、このたび寄贈できました。大きなトラックで狭い山道を運んできたため不安がありましたが、無事設置されました。

学校図書室がベースになることで、移動図書館車が運んでくる新しい本とともに、教育環境の着実な向上に寄与すると思われます。これらの教育支援活動はボランティア貯金の助成金を

写真：広くて明るいヴレラ小のコンテナ図書室

活用しながら進めています。着実に芽が出てきています。

学校菜園活動の展開～ンドウェドウェ地域からウグ郡へ、学校菜園から家庭菜園へ

JICAの助成により、ンドウェドウェ地域では教育支援活動と並行して、学校菜園活動が展開されてきましたが、今回の視察でもその成果を垣間見ることができました。ヴレラ小ではストライキで学校がお休みでしたが、生徒のお母さんが水をやりに来ており、何度も水を運んで丁寧な菜園の世話をしていました。これは、地域のコミュニティを巻き込んでいることを示しており、学校が休みのときも地域でケアする仕組みがあることで、学校菜園の継続性が期待できます。また、ズバネ小ではより広い菜園が展開されており、大きなキャベツやホウレンソウが青々としていました。その一方で、マシザ小のように菜園や果樹園が枯れてしまっているところもあり、今後どのようにケアしていくかが課題としてあげられます。最終的には現地で自立する必要があるため、どこまでフォローするかは難しいところです。

JICAの助成は今年度以降も継続されることになり、この夏からは、ンドウェドウェで成果を出した学校菜園活動をダーバン南方のウグ郡へ拡大展開することになりました。今回の視察ではウグ郡を訪問することはできませんでしたが、学校菜園スタッフと入念な打ち合わせを行いました。今回の学校菜園プロジェクトでは、農場を経営するリチャード氏を指導者として迎え、その教えのもとに2人の現地スタッフ（ニコラスさん、ザコナさん）がウグ郡の対象校をまわって先生や生徒を指導することになります。基本的には有機農法ですが、学校菜園にとって大きな課題である水や塀などについて話し合いをしました。また、いずれコミュニティへの展開を考えていますが、現状を踏まえると共同菜園よりも個人菜園のほうがうまくいきそうだ、といった方向性が見えてきました。 **写真：ズバネ小の菜園**

ケア施設への支援

当初予定にはありませんでしたが、ストライキのため時間ができたこともあり、子どものためのケア施設を2か所訪問いたしました。1か所目はイギリスのファンドなどにより支援を受けている施設で、清潔感があり、静かな佇まいでした。予約は入れていませんでしたが、施設に入っている子どもたちと束の間の遊び（折り紙、踊り等）を楽しみました。2か所目は、移動図書館車スタッフの居住地からほど近いところです。こちらは施設といってもまだ建物らしいものがなく、今後施設をつくっていきたいとのことでした。地域のお母さんたちが子ども達の面倒を見ており、この日は様々な踊りを披露してくれました。

TAAAとして今すぐに何か支援をすることは難しいかもしれませんが、本や移動図書館車という“資源”を活かせば、小学校への支援と似たものを横展開することはできるかもしれません。ただ、会としての体力も考えながら総合的に検討する必要があります。今言えることは、学校以外にも支援が必要な場所がたくさんある、という事実です。

現地スタッフの体制

現在、TAAA南アでは、平林・南ア事務所代表を中心として、現地スタッフが図書活動プロジェクトで4名、学校菜園プロジェクトで3名います。今回は全員と会うことができましたが、みな実務能力があり、問題意識が高く、コミュニケーションも良好でした。

ただ、処遇という観点では若干不満な部分もあり、各自のミッションに見合った待遇が求められるかと思えます。雇用期間の延長、賃金の改善、健康管理への配慮など、やるべきことはたくさんあります。今回はこれらの点につき課題として明確にしました。

日本ではNGOの人件費に関する理解が足りないように感じます。効果のあるプロジェクトを行うには、優秀な人材を雇用し、そのメンバーのモチベーションを保つことでより良い支援ができると考えます。TAAAの日本側スタッフは全員無給のボランティアですが、現地スタッフは我々のプロジェクトに生活を捧げてくれていますので、それなりの処遇が必要です。そのための資金をどのように調達するか、今後TAAAのプロジェクトを安定稼働させるためにはとても重要です。

おわりに

初めての南アでしたが、気候は冬で過ごしやすく、しっかりプロジェクトを視てくることができました。今回あがった課題、アイデアなどを今後どのように活かしていくことができるか、それが最も大切だと思います。また日本から無理せず少しずつ着実に、南アの人々のためにお手伝いをしていきたいと気持ちを新たにいたしました。

写真：移動図書館車とズバネ小の生徒たち



南アフリカ訪問で感じた事

山下八千穂

TAAA 寄贈によるヴレラ小のコンテナ図書館

5年前に続き2度目の南ア訪問は、教師たちの待遇改善の為にストライキ中で、殆どの学校が閉鎖中であった。それにも拘わらず最初に訪れたヴレラ小では、わざわざ校長先生それに教師や母親達が集まって、我々一行7人を歓迎してくれた上、素敵な飾り物まで頂いた。中古のコンテナの中が図書館になっており、絵本や算数セットが低い本箱に半分位入っていた。床の上には日本から送ったダンボール箱が「ダーバン行き」という紙を貼ったまま置いてあり、多くの方々の思いがここまで届いているのが確認出来て良かった。その後サンドイッチ、チキン、飲み物などの貴重なご馳走を頂き、申し訳ないような気がしたが、我々の活動に対する感謝の気持ちが伝わってきて嬉しかった。

ズバネ小の新しい教室と畑

翌日のズバネ小訪問の時も同様で、誰もいないはずの学校に生徒全員が集まり、歌や踊りを見せてくれた。その後先生方や教育省の役人、地元の代表等30人程が集まり、日本政府の援助によって建てられた新校舎引渡しのセレモニーが行われた。低音が心に響く賛美歌や祝辞、来賓紹介や男子生徒2人による詩の朗読など厳かな雰囲気で行進していった。ここで予想外に時間がかかった為、折角用意して下さった昼食を食べる余裕がなくなってしまった。昼をかなり過ぎていたのでグーグーお腹は鳴っていたが丁重にお断りし、移動図書館スタッフのために少しだけ頂いて次の訪問先である牧場に向かった。

南アで10年活動している平林さんの存在

これらの温かい歓迎の裏には、平林さんのお人柄は勿論のこと常日頃の地道な活動の積み重ねがあったからこそであり、更にボランティアの多くが滞在中だけ片手間に援助しているのと違い、10年以上南アに住み朝から晩まで南アの人々の為に働いている事も信頼される大きな理由だと思う。遠い異国の地で普段周りにいるのは若者だけであり、平林さんは彼らの上司のような立場である為、どんなにか孤独を感じていることであろう。日本語がしゃべれない辛さもおありになると思う。しかし彼女を見ているとそんなことは微塵も感じられない。きっと彼女は試練を乗り越える度、強く優しく更に深くなっていくのかもしれないと思った。

リチャードの有機農園

次の訪問地で、私は至福の時を過ごした。午後3時頃、私達の車が到着すると同時に牧場主であるイギリス人のリチャード氏、農業指導員のニコラス氏とザコナさんと大きな犬たちが出迎えてくれた。広いリビングに通された私たちが最初に見たものは、入り口のテーブルにあった手作りのホールケーキ2種類であった。レモンケーキとチョコレートケーキのどちらがおいしいかと聞かれた時、空腹だった私たちはすぐに返事ができなかった。リチャード氏は何の迷いもなく2種類もお皿にのせてくれた。甘さも充分でしっとりしていて、美味しかった。オレンジジュースは庭にある木からもぎたてのオレンジを絞ったものだった。

皆が忙しい時間を割いて、南アの人々の為に真剣に話し合ったこの数時間は、何と貴重なひとときであったことか。常に他人の幸せを考えるリチャード氏の生き方に、私は深い感銘を受けた。彼によると、学校菜園と違ってコミュニティ菜園は、実際に畑仕事をする人としていない人が出てきたり、収穫した野菜を分ける時に揉めたりする。また未亡人は縁起が悪いと言って菜園の出入りを禁止したりするので、ファミリーごとの菜園がいいのではないかと競争をして苗木などの賞品をだしたらどうかという意見も出た。

真剣な話し合いは夕方まで続いた。地球の反対側で何という充実した夢のようなひとときを過ごしているのだろう、と別の自分が感動

に震えていた。外が薄暗くなってきたのでミーティング終了後、広い庭を案内してくれる事になった。化学肥料を使わない畑は、好き勝手にバラバラに見えて実は計算しており、虫除けの為所々にローズマリーやレモンライムなどのハーブが植えてあった。家畜は牛やうさぎの他に絶滅種の山羊もいた。この邂逅は私のこれからの生き方に、少なからず影響すると思った。

最後に、帰国前日のミーティングで隣に座った、移動図書館車の運転助手であるシヤ青年の独り言をお伝えしたい。

「日本人大好き！」

写真: 左端がリチャード氏



エクシザネ子どもケアセンターで折り紙を教える筆者(右)



～シンポジウム～

「どっちが深刻？ 日本の貧困 世界の貧困」

久我 祐子

9月19日、TAAAもサポーター団体会員として登録している「反貧困ネットワーク」共催のシンポジウム「どっちが深刻？ 日本の貧困 世界の貧困」に参加した。これは、9月17日から19日の貧困をなくすために“立ち上がる”世界同時イベント「スタンドアップ・テイク・アクション」プログラムの一環である。パネリストは、作家・反貧困活動家の雨宮処凜さん、「動く→動かす」事務局長の稲場雅紀さん、UNDP 国連開発計画駐日代表の村田俊一さん、反貧困ネットワーク事務局長の湯浅誠さん、ジャーナリストの吉岡逸夫さん。サブタイトルは「犠牲の累進性を超えて」。まずはこの聞き慣れない「犠牲の累進性」の説明から講演は始まった。これは「お前の置かれた状況などは、ほかのもっと貧しい人や大変な人に比べたらなんでもない」という言い分で問題から目を逸らせ、我慢を強いるやり口や雰囲気だという。たとえば正社員の長時間労働よりも非正規の低賃金の方が、派遣労働者の不安定労働よりもホームレスの過酷な生活の方が、日本のホームレスよりも第三世界のスラムの貧民の方が大変だといういい方で、現在その人が向き合っている困難を「仕方がない」と我慢させる。日本の貧困問題に声を挙げ続けてきた湯浅さんは「日本のホームレスの問題を話すと、アフリカの貧困と比べればたいしたことないという人がいるが、その同じ人に、たとえば、アフリカの問題を話せば、そんな遠い国のことよりも、身近な日本にたくさん問題があると言う」と指摘し、そして、そのような切り口の目的は、一言でいえば「黙らせる」ことであり、身近であろうと遠くの国の問題であろうと、それを問題視させずに黙らせる雰囲気危険視する。一般市民が黙ることで、身近な貧困はどんどん広がり深刻化し、また距離が遠いという理由で発展途上国の問題に無関心であると、政府によるODA無駄遣いなどの問題がノーチェックで蔓延化したり、極貧問題などもいつまでたっても未解決のままであることなどに、話し合いは展開していった。

「動く→動かす」の稲場さんは、冷戦後、資本主義がむき出しになる過程で、経済格差は先進国と発展途上国の間でも、一つの国の中でも広がり、今は複雑な格差社会となっていると指摘する。先進国においては、国内に第三世界的貧困が広がり、発展途上国の国内には富を独占する「先進国」が出来ている。身近な貧困問題も途上国の貧困も、根っこは同じで、相反するものではない。黙らされることなく、グローバルに声を挙げていく必要性を強調していた。

今年のスタンドアップのタイトルは”Make a noise”（声をあげよう）ということで、シンポジウムは、アフリカドラムで始まり、威勢のいい和太鼓演奏で締めくくられた。講演後、参加者全員が、それぞれ持参の鳴り物で大いに音を立てながらスタンドアップをして「黙らない」意思表示をした。

アパルトヘイト後の南アでは、縮小されるべき格差が益々広がり、その中で圧倒的の大多数の人々が、取り残され今でも貧困生活を強いられている。一方、足元の日本国内では貧困と格差が社会問題となり深刻化している。TAAAは、そんな日本から、格差社会の大先輩ともいえる南アフリカを支援しつつあるが、今回のシンポジウムに参加して、両国の貧困問題がグローバル化のなかで通底していることを再認識した。私は、どちらの問題に対しても黙らない決意をこめて、スタンドアップをした。



編集部

TAAAは、今年も9月12日の英語の本の梱包作業をしたその午後に、いち早く、反貧困宣言文を朗読し、しゃがんだ姿勢から、手を大きく上げてスタンドアップを行ない、黙らない、行動することを確認しました。

TAAA 学校訪問記

北海道大学

青江 翔太郎

私は途上国と呼ばれる国へ行ったことがなく、どのような問題があり、どのような現状なのか、この目で見たことがなく、そういった問題がもし実際にあるのならばいつか実際に見てみたいと思っていました。そして、この夏 TAAA の学校訪問に同行させて頂きました。

写真：後列中央が筆者

【1日目(8th Sep, 2010)】

1日目には3校を訪問しました。普段は一日に2校ずつ回るのですが、実は私が学校訪問に行く前日まで昇給闘争ストライキが約4週間も続いており、学校がずっと閉鎖されていたのです。(現在も一時 suspend というだけで終わってはいないようです)そのため、1日に回る学校を増やして3校回りました。

Durban 市街できぼう号へと乗り込み、私自身初となる Durban の景色に胸躍らせながら出発しました。初めのうちは TAAA の現地スタッフの方に色々説明してもらいながらの楽しいドライブでした。ただ30分も車を走らせるとアスファルトはなくなり、登山道のような道になりました。よほど驚いた顔をしていたのか「日本にこんな道はあるかい？」と聞かれてしまいました。そうやって辿り着いた1つ目の学校。ハッチをあげ移動図書館を開館。ですが、誰も本を借りに来ません。どうしたんだろうと話を聞くと小学校に空き巣が入り込み、今はその件でゴタゴタしているとのこと。残念ながら本を貸し出すことなく、次の小学校へ、2校目では菜園を見せてもらいました。土壌に恵まれている畑では作物が立派にできていました。この学校ではアボガドの樹もあり、生徒が上手に木に登って一つアボガドをくれました。子供たちもこんな給食を食べているのだろうかと思いをはせながらおいしくいただきました。そして、3つ目の学校、着いて車から出てみるとたくさんの子供たちがグラウンドで遊んでいました。今迄の2校に比べどこかエネルギーに満ち溢れている印象を受けました。昨日までストで学校がなかったことも手伝っているのでしょうか、元気が有り余っているようです。私にも興味津々なのか、じっと此方をうかがってこちらをからかってきたりします。反応してこちらが追いかけて行ったりすると大声を出して笑いながら逃げて行きます。本当に元気が有り余っている！！この元気な子供達が4週間も学校に行けていなかったと思うのもったいない！大人達にとってストは重要かもしれないですが、関係のない子供たちが一番の被害を被ってしまうのはおかしなことです。そして、この学校でもう一つ特筆すべきことは教師がとても嬉しそうにしていたことです。私達が来るなり、子供たちにも負けにくいぐらいの笑顔でこちらに近づいてくるのです。この笑顔によって、図書館は子供たち学ぶ側だけでなく、教える側である大人たちにもやる気を与えることができるのだと気づかされました。

【2日目(9th Sep, 2010)】

1日目の学校も山奥だったものの、今日は更に rural な地域への訪問でした。まず一つ目、昨日同様凸凹の道を登って行くと小学校が現れました。玄関に入っていくと男の子たちは人見知りをしているのか、警戒の色を示しながら車についてきて女の子たちは固まってこちらを見ながら笑いかけてくれました。ここでは先生が生徒の分も本を借り、生徒は思い思いのことをしていました。女の子はおしゃべり、男の子はサッカー。サッカーが余りに楽しそうで、輪に加わってサッカーに興じてしまいました。南アに来るまでは日本とどれだけ違うんだろう、どれだけ貧困はひどいんだろうと差があるものとして想像してしまいましたが、一緒に輪になってボールを蹴ってみれば何のことはない、ただの僕らと同じ子供でした。当たり前のことですがそのことに気づき、一気に私の中でアフリカとの距離が縮まりました。そして、2つ目。とても広い学校でした。休憩時間になり、生徒たちが本を抱えて続々と教室から出てきました。あっという間に図書館が子供たちで溢れかえりました。

2日間の学校訪問を通して実際に本が学校に届けられる様を見て移動図書館が本を運ぶことで、教師には教える楽しさ、生徒には学ぶ楽しさなどを届けていることを知ることができました。勿論、写真やレポートでその事実は知ることができますが、子供たちが本を手にした時の喜びの声を聴き、どの本にしようかと選ぶ時間を共に過ごすことができた今回の経験は大変貴重なものでした。



◆主な活動 (2010年5月16日～2010年9月15日) 下線は南アでの活動(平林と南アのスタッフ)

- 5/18 「ひろしま祈りの石」を訪問 平林薫 久我祐子
 5/19 (株)コンセプトを訪問 平林 久我 野田千香子
 5/20 AJFにて「南アの基礎教育」 平林 野田 米山周作
 5/20 住所ラベル準備 西村
 5/20～30 会報53号編集 野田 校正 西村裕子
 5/21～アフリカンフェスタ申し込み調整 丸岡晶
5/23 南アへ戻る 平林
5/24～28 ンドウエドウェ学校訪問 平林
 5/28 千葉アーシアンショップ講演 久我
5/31～6/4 ンドウエドウェ学校訪問 平林
 6/2 ソニーCSRへ 久我 野田
6/6 南アTAAAミーティング 平林
 6/7 会報発送準備 近藤信幸 野田 6/8 郵送 野田
6/7～8 ンドウエドウェ学校訪問 平林
 6/9 会報53号をHPに掲載 近藤
 6/10～ 会計関連入力 西村
 6/11 クリスマスアカデミーインジャパンインターナショナルスクールへ本の引き取り 浅見
 6/12 アフリカンフェスタ 横浜にて出展 中野敦子
 浅見克則 丸岡 西村 野田 佐々木佳世子 榊裕美
 6/13 アフリカンフェスタ 中野 山下八千穂 上林潤子
 榊 下谷房道
 6/21 弁護士事務所へ 久我 津山直子 野田
6/23 JICAプロジェクト会議 平林
 6/26 「南アフリカを知るための60章」出版記念座談会
 津山直子 牧野久美子 野田
6/29 プンガシエ教育センターにてスタッフ面接 平林
7/1 プンガシエ教育センターにてJICA事業開始の
 調印式 平林
 7/3 本を作業場へ運ぶ 浅見
 7/3 ミーティング 野田 浅見
7/5 プンガシエ教育センターにてスタッフ面接 平林
7/6 ズバネ小訪問 平林
 7/7 東京インターナショナルスクール本引き取り 北爪
7/8 プンガシエ教育センターにて会議 平林
7/9 移動図書館車点検 平林
 7/11 梱包作業と会議 北爪健一 浅見 野田
 鯨井幸一 西村 上林 下谷 榊 小宮絵里
 浦和学院高校より 大熊諒 郷間仁輝 渡辺尚人
7/14 プンガシエ教育センターにて会議 平林
7/15 ンドウエドウェ学校訪問 平林
7/16 ドウドウドウ教育センターにて会議 平林
7/17 図書プロジェクトファシリテーターと会議 平林
 7/19 HP更新 渡恵美子
7/19～20 図書プロジェクト教師研修会準備 平林
 7/20 JICAと事業契約書を交わす 野田
7/21 図書プロジェクト教師研修会 平林
- 7/22 移動図書館車ライセンス更新 平林
 7/23 AJF訪問相談 津山 久我 野田
7/23 ポートシエプトン教育省にて会議 平林
7/26～28 7/30 ンドウエドウェ学校訪問 平林
7/29 JICAプロジェクト会議 平林
 8/2～ 報告会チラシ作成 丸岡
8/2～6 10～12 ンドウエドウェ学校訪問 平林
 8/10～17 「そらいろのたね」30冊ズルー語シール 北爪
 健一 北爪ふみ子
8/13 JICA車両引き取り 平林
 8/15～Web媒体・メルマガへのリリース 丸岡
8/16～20 ンドウエドウェ学校訪問 平林
8/21 南アへ出発 野田 丸岡 山下
8/22 南アTAAAスタッフとミーティング
8/23 ヴレラ小コンテナ図書室訪問、南アTAAA会議
 平林、マイケル、シヤ、ドウドウ、野田、丸岡、山下
8/24 ズバネ小訪問新教室建設祝い、農業指導者リチャー
 ドの農場見学と会議 リチャード、ニコラス、ザコナ
8/25 午後、移動図書館スタッフと会議 夜、会議
8/26 マシザ小プレハブ図書室設置訪問 クワマシュー
 地区の子どもたちのためのNGO訪問
8/27 タタクサ小校長と会議、孤児院訪問、TAAA会議
 8/29 南アより帰国 野田 丸岡 山下
 8/29 「そらいろのたね」シールプリント及びカット 西村
8/31 グロスヴィーナー高校図書室訪問 平林
 9/1 セントメリーインターナショナルスクール本引き取り 北爪
 9/4 報告会の通知マスコミへ 野田
 9月上旬 グローバルフェスタ申込調整 丸岡
9/7 州教育省ELITS倉庫で本整理 平林
 9/8 国際ボランティア貯金助成プロジェクトの中間報告
 書提出 久我
9/8～9 北海道大学青江さんが南アTAAA訪問
9/10,13,15 州教育省ELITS倉庫で本の整理 平林
 9/12 作業と会議 北爪 鯨井 野田 上林 西村 浅見
 山下 渡辺英道 反貧困「スタンドアップ」を実施
 9/12 縄跳び紐の引き取りに行く 山下 浅見
 9/13 本の集計表作成 上林、輸送依頼 野田
9/14 JICAプロジェクト会議 平林
 9/15 会議(JICA事業について) 久我 津山 野田

ルイボスティのご紹介

ルイボスティ茶は南アの西ケープ州だけでとれる健康茶です。カフェインが少ないのでどなたでも召し上がれます。(5箱以上 送料無料)
 1箱 80パック 2000円(送料一律500円)
 1パックでヤカン一杯のお茶が飲めます。
 お申込みは、P12のTAAA連絡先へ
 ルイボスティに同封する振込用紙で後からご送金ください。